

‘星空舞’ の分施体系栽培における 適正な基肥窒素施用量

‘星空舞’は、生育初期の過繁茂が籾数過剰に繋がり、品質低下やくす米発生の一因となっている。高品質・良食味米生産のため、初期の生育量を適正な範囲に制御した栽培管理を行うことは重要である。そこで、農業試験場場内ほ場・現地ほ場調査を行い、全標高に適用できる‘星空舞’の適正な基肥窒素施用量を明らかにした。



‘星空舞’ の分施体系栽培における 適正な基肥窒素施用量は、3kg/10a

鳥取県の新しいお米
星空舞

標高150m未満のほ場

基肥窒素3kg/10a施用で

- 1) 幼穂形成期茎数を適正に確保できる。
- 2) 穂肥施用時に葉色診断できる葉色に低下させることができ、適正に葉色をコントロールできる。
- 3) 高い食味値を確保しやすい。

簡易判定			
10a当り 基肥 窒素量	幼穂 形成期 茎数	穂肥1 施用時 葉色	食味値
2kg	△	△	×
3kg	○	○	○
4kg	×	×	△

注) ○：良い、△：やや劣る、×劣る

標高150m～500mのほ場

基肥窒素3kg/10a施用で

- 1) 幼穂形成期茎数を適正に確保できる。
- 2) 精玄米重を高く維持でき、精玄米歩合が多くなる傾向がみられる。
- 3) 基肥窒素4kg/10a施用と精玄米重は同等であるが費用対効果の面から、基肥窒素3kg/10a施用が有効である。

簡易判定			
10a当り 基肥 窒素量	幼穂 形成期 茎数	精玄米 重	精玄米 歩合
2kg	×	×	△
3kg	○	○	○
4kg	△	○	△

注) ○：良い、△：やや劣る、×劣る

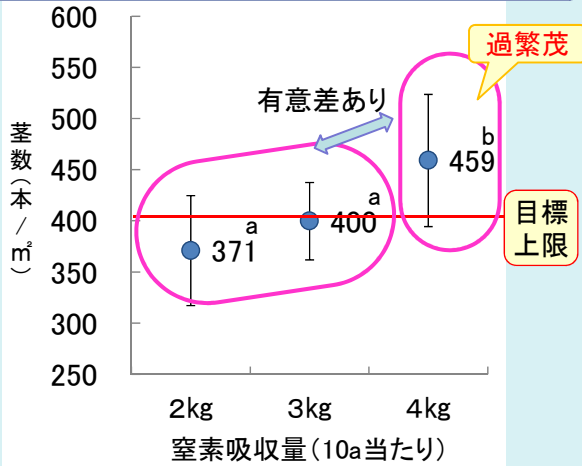
留意点

- 1) 普及の対象 標高500m程度までの‘星空舞’の化成肥料分施体系ほ場
- 2) この情報は、県内の現地試験ほ場および農業試験場内ほ場において2020年から2021年に調査を行った結果である。
- 3) 試験を実施したほ場の可給態窒素は8.3～25.8mg/100g（平均：18.1mg）である。土壌分類は低地水田土（2ほ場）、灰色低地土（6ほ場）、黒ボク土（2ほ場）である。
- 4) ほ場条件（地力、排水条件等）によっては、基肥窒素施用量を減量する。

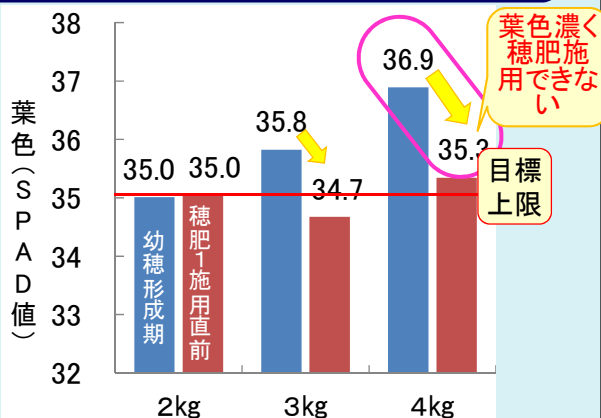
[具体的データ]

標高150m未満のほ場

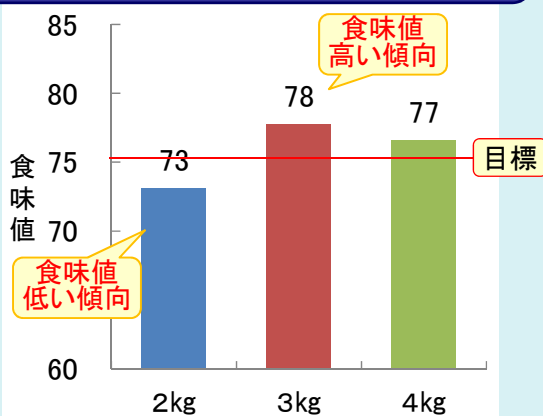
基肥窒素施用量と幼穂形成期茎数の関係



基肥窒素施用量と穂肥施用前葉色の関係

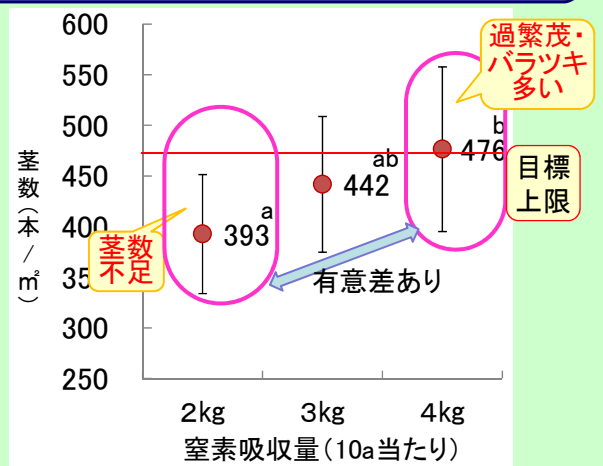


基肥窒素施用量と食味値の関係

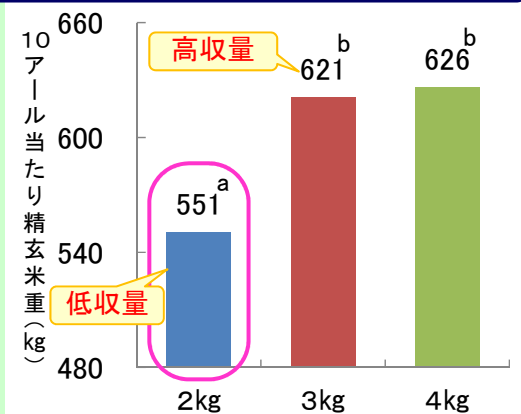


標高150m~500mのほ場

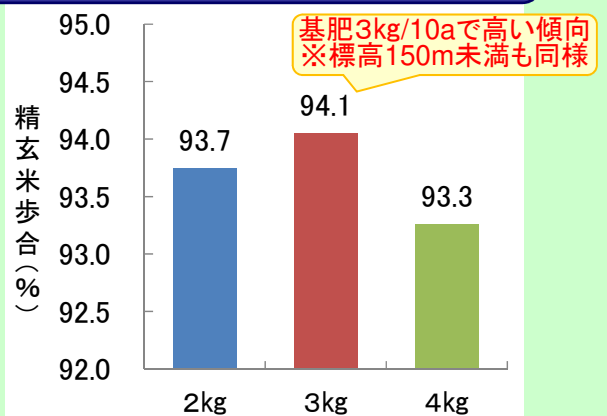
基肥窒素施用量と幼穂形成期茎数の関係



基肥窒素施用量と収量の関係



基肥窒素施用量と精玄米率の関係



(問い合わせ先) 鳥取県農業試験場 環境研究室 TEL: 0857-53-0721

※本書から転載複製する場合には必ず農業試験場の許可を受けて下さい